



以下の症例の病名は、それぞれ何でしょうか？(答えは写真解説の下に掲載)

### 症例6

25歳男性。39.0度台の発熱・嘔気を訴えて救急外来を受診。



森編

### 症例7

15歳女性。朝から嘔気や下痢を伴った急な腹痛が出現。



林編

### 症例8

23歳男性。午後1時頃から腹痛が出現。数回嘔吐し、午後8時に救急車で搬送。



木編

当初、診察した医師は、咳も鼻水も認められないのに、発熱だけで即、「風邪」と診断し薬を処方した。しかし、X線写真には骨盤にまで達する肝臓腫大と脾臓の腫大(肝脾腫)が認められた。しかも血液検査では、白血球が2,700/ $\mu$ L、血小板が3万9,000/ $\mu$ Lと異常に少ない。触診すると腹部の腫れと痛みが確認されたが、見逃されていた。最終的に骨髄穿刺で判明した病名は……？

まず近医を受診したところ原因不明と告げられ、救急外来を受診。当初、診察した研修医は心窩部痛や左腹部痛などを認めたことから「急性腹症」と診断し、緊急手術の適用と考えて外科医を探し始めた。しかし、X線写真では、直腸やS状結腸などに便の滞留をうかがわせる所見が映っていた。腹部CT検査を追加して調べたところ、結腸全体にも明白な便の滞留が認められた。さて、その原因は……？

当直医は「急性虫垂炎」を疑い、採血・造影CT検査を施行し、坐薬を投与したところ症状が軽快した。翌日、消化器内科でX線写真を撮影したのがこの写真だが、腎臓がここまではっきり読影できるのは異常。本症例の場合、前日に投与したCT検査のための造影剤が排泄されず、腎臓にたまっていたことから白くはつきりと映りすぎていた。つまり、このX線写真の病態は……？それにより腹痛や嘔吐などの症状が現れていた。通常、X線写真で見えにくいものがはっきりと映っていたら、そこに何か異常があるのではないかと察知する想像力が求められる。

専門誌掲載 ← 8月号 (雑誌) ← 2月号 (雑誌) (雑誌) ← 11月号 (雑誌) ← 9月号 (雑誌)



いるという患者さんでも、実際にX線写真を撮ると多くの宿便を抱えていることがあります。そのような場合には、便通改善の処方をする、とても喜んでもらえます。

## 初期診療を確実にするための道標



これまでの連載で紹介したのは限られた症例ではありますが、診断経緯にいくつかの教訓を残しています。最初に当直の先生がX線写真を撮っておけば、もっと早く診断に近づけたのに、もっとしっかり読影すべきだった、CT検査さえしておけば……など。もちろん、X線写真だけですべてを診断できるわけではありませんが、X線写真でしか得られない情報もあるのです。

消化器疾患の診断は画像診断が中心ですから、多くの症例を経験して、「見る」ことや「診る」ことが大切です。すなわち、該当疾患を想起できなければ診断に到達できません。臨床においては、予想もつかない、かつて経験したことのないような症例に出会うことも少なくありません。そのため、自分が考えている診断が間違っていないか検証することが必要です。危機管理という見地からも、細大漏らさないために何をすべきかを考えながら診療を進めます。

病気の原因を解明していくのが診察です。これを河の流れに例えると、河口に患者さんがいて、その河を源流までさかのぼると原因の病気がわかる。X線写真を使うのはその一番最初。腹部症状を訴える患者さんの診断アルゴリズムの中に入れて活用していただきたいのです。

## 説明できない“第六感”も大切に



重要なのは、X線写真を読影できなくても、「何かヘン

だな」と感じることです。「そのままにしては心配だ」と“第六感”を感じたら、「一度、専門の先生に相談してみませんか」と声をかけてほしいのです。紹介状は最終診断である必要はないはず。結局、異常なく、患者さんが元気で帰ってきたら、お互いが安心できるのではないのでしょうか。逆に、“第六感”を感じなかったらどうなるのでしょうか。患者さんが、そのあと救急車で搬送されることがあるかもしれません。X線写真を撮らないまでも、倦怠感を感じている方が、実は膵臓がんだったなどという事例は枚挙に暇がありません。プライマリケア医は、患者さんにとって一番身近な医療の専門家です。ですから、専門外のことも相談されることがあると思います。その付託に応えるために、消化器疾患の診断の第一歩としてX線写真を活用していただきたいと思います。

プライマリケア医のもう一つの大切な役割は、患者さんを病院に橋渡しすることだと思います。病院の勤務医からすると、もう少し早く紹介してほしかったと思う症例も少なくありません。X線写真を活用することで、早期の診断(判断)の助けといただければ、診断・治療もスムーズに進み、理想的な病診連携もできるものと思います。腹部症状を訴えられる患者さんで、妊娠の可能性のない方でしたら、是非、X線写真を撮影されることをお勧めします。もし、X線写真を撮って役に立ったという症例がありましたら、下記mailにご一報ください。

皆様のますますのご活躍をお祈り申し上げます。

読者のみなさまからの、「ドクター西野の“気づき医療”のススメ」コーナーへのご質問、ご要望、ご感想などをお待ちしております。送り先 エルゼビア・ジャパン株式会社「PCP」編集部 e-mail pcp\_kizuki@elsevier.com